SOCCER TOCHIGI COMMUNICATION MAGAZINE

SOCCER TOCHIGI

（社）栃木県サッカー協会事務局
〒320-0834　宇都宮市陽南2-12-19
TEL　028-684-6900 / FAX　028-684-3330
URL　http://www7.ocn.ne.jp/~tfa/

vol.71
平成17年８月15日発行

contents

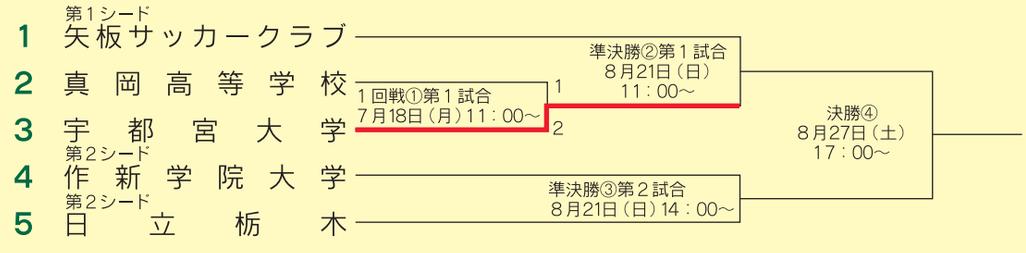
❶ 第１０回栃木県サッカー選手権大会
❷ 副会長に就任して
❷ 記録広報委員会を振り返って
❸ 「女子トライアルＦＡ」事業始まる
❸ 女子連盟が25周年
❹ 関東大学リーグ２部への挑戦
❺ 日本クラブユース大会関東予選に参加して
❻ 2005年　競技規則の改正
❿ ＪＦＡプリンスリーグ
⓫ ゴールキーパー講習会に参加して
⓫ 関東フットサルリーグ参入戦
⓬ クラブ選手権に初優勝して
⓭ 国体Ｖ３に向かって
⓮ 私とサッカー、私と審判
⓯ ＪＦＡフェスティバル開催予定
⓰ 編集後記

皆さん！是非スタジアムにおいで下さい！

栃木トヨタカップ

第10回栃木県サッカー選手権大会

（天皇杯栃木県予選会）



FAIR PLAY PLEASE　フェアプレイを心がけましょう

副会長に就任して

副会長　岩 原　克 彦

日頃から、栃木県サッカー協会の活動に対し、深いご理解と、ご支援、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、この度の栃木県サッカー協会総会において、若輩者の私に副会長のご下命がありこの度、就任致しました。

前任の副会長は栃木県サッカーの現在を築かれた教育にご指導に卓越した方々で、到底私など足元にも及ばず、お受けするに際し非常に迷いました。しかし、私には、大勢の皆さんに支えられながら社会人連盟でサッカーを楽しんできたという宝物がありました。この宝物を大切にしながら、今後は委員会や連盟の枠を超えたサッカー活動に夢を膨らましたいと考えお受けすることに致しました。

今、県内ではＪＦＬの栃木ＳＣが連勝に次ぐ連勝で、何と前期１位で折り返しました。今後は、皆さんが待ち望んでいた夢を実現に向け行動しようではありませんか。ドイツWカップの切符もジーコジャパンに入りました。そうして、栃木県の国体成年選抜チームはＶ３に挑戦します。皆さんの周りはどの位サッカー熱が上昇しましたか。

私はサッカーボールを蹴り始め早や４５年が過ぎようとしています。一生涯サッカーをと若い時に思い込み、お蔭様でその夢が続いております。

現役時代の関東リーグでの苦戦、国体出場の際の心温かい物心両面のご支援、社会人連盟の運営等々、サッカー協会をはじめ、諸先輩、仲間の皆さんに支えて頂き、現在に至りました。

今後は、微力ではありますが、皆様のお役に立てますよう精進して参ります。本寄稿は「2000km離れたタイ国より」させて頂いております。　先日、弊社の従業員10人位が残業に入る前の20分間、コンクリートの上を作業着のままで、自分達が作った木製のゴールに向かい、古く擦り減ったボールを夢中になって奪い合っている光景を見つけました。

サッカーの原点を見た感がありすごい衝撃を受けました。芝生の空き地の使用とミニゴール及びボールの購入を総務のマネージャに指示しました。海外でサッカーチームが出来そうです。

近々に、本サッカー栃木にチーム誕生の寄稿が出来ますよう頑張ります。国際色と、広い視野でのものの考え方を少しでも身につけようと思っています。以前に倍した叱咤、激励をよろしくお願い申し上げます。

新理事紹介

今年度（社）栃木県サッカー協会は役員改選の時期でした。この度、次の５名の方が新しい理事となりました。
鈴木勇氏（第１種）、金子充氏（地区）、福田治氏（シニア）、川端宏之氏（記録広報）、阿久津弘幸氏（キッズ）の方々です。
どうぞよろしくお願い申し上げます。

鈴木氏

金子氏

福田氏

川端氏

阿久津氏

記録広報委員会を振り返って

奥　澤　　浩

昭和５３年から２７年間（委員として１３年、委員長として１４年）記録広報委員会で活動して来ましたが、この度有能な後任が現れましたので、バトンタッチをして委員会を退く事になりました。

私は本来、記録すること、記録を収集することが好きでした。高校生の時に、現在の「ＪＦＡニュース」の前身、日本蹴球協会の機関誌「サッカー」に“地方だより”を投稿したのが、切っ掛けだったでしょうか。当時は、県内の誰一人として私の存在を知らず、しばらくして、今はもう亡くなられた徳田有基氏から「日本協会へ記録を送っているのは君かね」と、声をかけて頂きました。昭和３８年の頃でした。

ここで、県協会の広報紙「サッカー栃木」の流れについて、皆様に少しご紹介致します。記念すべき第１号は、昭和５２年１１月２１日に発行されました。第２号は翌年５月２０日に、いずれも「手書き」のものをコピーして、綴じた冊子でした。私はこの頃から、関わり始めました。なお初代の委員長は、中島一輔氏でした。

平成３年に委員長となり、第４３号（１０月１日）から私が発行する事になりました。８年１２月の第５６号までは「Ｂ５サイズ」で発行し、１０年３月の第５７号から「Ａ４サイズ」に変わりました。さらに１７年１月発行の第６９・７０合併号からは、時代の流れで「カラー化」となりました。

この１４年間を振り返りますと、栃木県フットボーラーのメッカ「グリーンスタジアム」が完成し、そこでＪリーグや天皇杯が行われました。平成５年には「インターハイ」も開催されました。石﨑、星野理事長、吉江専務理事の下で「サッカー栃木」の編集を任される様になってからは、原稿が集まらず苦労しました。

その様な時、無理なお願いにも拘らず、快く引き受けて下さった谷中次夫氏（当時真岡高校）、岩﨑研一氏（当時泉ヶ丘中学校）には、本当に助けて頂きました。くじけそうになった時も、ずい分ありましたが「今回のあの記事は良かったよ」などと、声を掛けて頂いた時は、大いに力が湧いて来たのを、昨日のように思い出されます。でも、何一つとして満足するものは、発行できませんでした。

そして、この２～３年間「時代の流れ」を痛感していました。サッカー栃木を発行するたびに。大会や行事があるたびに。「もう私の時代ではない」と。そんな時に、有能な後任が現れました。その人とは、川端宏之さん。偶然にも私の（姿川中学校）後輩でした。ここ２年間の川端さんの活動を見ていて、「この人物なら安心して後を任せられる」と、確信しました。新たな記録広報委員会、サッカー栃木に、大いに期待しております。

最後になりますが、いままで拙い広報紙を読んで下さった方々、私を支えて下さった多くの方々に、この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

●「女子トライアルＦＡ」事業始まる

今年１月１日、日本サッカー協会の川淵三郎キャプテンにより提唱された「キャプテンズ・ミッション」。この中に「女子サッカーの活性化」が設定され、その活動指針のひとつに女子サッカーの普及、推進を目的に具体的な試みをする「トライアルＦＡ」制度が設けられました。これらの動きを受け、栃木県女子サッカー連盟では「レディースフットサルリーグの創設」「女子連盟登録選手と第４種登録選手のU-12合同トレセン」「ウィメンズカレッジ」の３事業の実施を日本サッカー協会に申請、認められました。早くも７月までに２つの事業がスタートしました。

栃木県レディースフットサルリーグ創設

これまで２年間、２００２年日韓ワールドカップ記念事業として年３回のフェスティバルを開催し、その中でフットサル大会を行ってきました。参加人数は年々増加し、公式戦未登録のチームや個人参加の人の参加も目立つようになりました。サッカーに比べ、５人というプレーヤーの少なさや、登録手続きの手軽さなどが、増加につながっていると考えます。

そこで、ある程度の期間、フットサルができる機会を作ろうとリーグ創設を決めました。要項作成にあたっては、競技性を重視するか、フェスティバル形式にするのか多くの議論が交わされましたが、「トライアル事業に認定されなくても実施しよう」という企画だったため、競技性を重視したリーグとすることを決めました。

▲熱戦を繰り広げる選手たち

第１回リーグは６チームが参加し６月２６日開幕、８月まで総当りのリーグ戦を繰り広げています。社会人連盟の方々の協力をいただき、会場の問題などはクリアしましたが、同時に「未登録チームの参加が少なかった」「参加チームが社会人チームに集中してしまった」などの課題もできました。来年以降、これらの課題を解消できるよう、「競技性の高いリーグとエンジョイリーグの併設」などを検討していきたいと思っています。（理事長　井上知佐子）

第４種登録の女子選手とのU-12合同トレセン

女子連盟登録のU-12選手と、第４種登録のU-12女子選手の合同トレセンが７月９日、那須塩原市の三島体育センターで行われました。同世代の交流やレベルアップを目的として初開催された事業で、女子連盟からはSCジュベニール所属の１１選手が参加、約４０人の第４種登録の女子選手とともに８人制のゲームなどで汗を流しました。

この日は日本サッカー協会派遣のコーチの方々を中心に、コミュニケーションを重要視した練習が進められました。練習中、選手たちの目の輝きは違いました。合同トレセンを終えた選手の間からも「楽しい。またやりたい」などの声もきかれました。本年度は２回の開催を予定していて、次回は１２月になります。

今回の合同トレセンは、私たち指導者たちにとっても実り多きものとなりました。このような流れは、本県女子サッカー界にとってよい方向性として見ています。来年度以降は回数を増やせていければと考えています。

▲コーチのアドバイスに耳を傾ける選手たち

（技術委員会U-12チーフコーチ　根岸敬静）

●SCジュベニールが４強入り
第10回関東女子ユース（U-15）大会

６月１２、１３、１９と千葉県の鴨川市運動施設陸上競技場ほか熱戦が繰り広げられました。今大会から都県選抜チームではなく、単独チームによる大会となり、関東各都県から１６チームが出場。本県からはSCジュベニールとセレソン宇都宮SCが出場しました。

SCジュベニールは、CCC　FUTURE'S（神奈川２位）、FC駒沢（東京２位）を相次いで破りベスト４に進出しました。準決勝では浦和レッズ（埼玉１位）、３位決定戦ではフィオーレ武蔵野FC（東京１位）に敗れましたが、大健闘の内容でした。

最上級生の中学３年生が２人しかいないチーム編成でしたが、大会を通して、フィジカル、走力で、他チームに引けをとらない戦いができました。県リーグで、社会人チーム、高校チームと対戦していることが、自信になっているようにも映りました。次回大会のシード権も確保したので、来年こそは全国大会出場（上位３チーム）を果たしたいと思っています。

（SCジュベニール監督　郷間昇）

●女子連盟が25周年

副会長　町田文男

１９８１年に産声をあげた本県女子連盟も、今年、４分の１世紀、つまり２５周年という節目の年を迎えました。世界に目を向ければ、昨年、アテネ五輪で日の丸をつけた日本代表チーム「なでしこジャパン」がベスト８に進出するなど活躍が目覚しく、その中に本県出身の安藤梢さん（浦和レッズ・レディース）がいたことは記憶に新しいことです。本人のサッカーに対するひたむきな努力、情熱、技術の錬磨に敬意を表するとともに、本県女子サッカー界に名誉と自信を与えてくれました。

本県女子連盟は、大先輩である矢口栄宏先生の並々ならぬご努力、ご苦労の上に礎が築かれ、本年度には少女からレディース（一般）まで１７チーム３７０人の選手が登録するまでになりました。この２５年間、女子サッカー運営に携わっていただいた旧役員、現役員の皆さんはもちろんのこと、チームスタッフ、選手の方々にあらためて敬意を表するところです。

本県サッカー界の振興、発展のため精進されている関係者の方々の深いご理解のもと、今後ともご指導、ご鞭撻をいただきながら、女子連盟も３０年、５０年とますます充実、発展していけるよう、努力を続けていきたいと思います。

関東大学リーグ２部への挑戦

作新学院大学サッカー部　監督　　町田秀三

《作新学院大学サッカー部の軌跡》
作新学院大学サッカー部は創部７年の若いチームです。
1999年にサッカー同好会から本学の強化指定部に認められ、「作新学院大学サッカー部」が誕生しスタートを切った。
１年目の目標は「チーム改革」というところから始まった。
当時、部員はサッカー同好会からのメンバーがそのまま残り27、8人居た。
しかし、同好会から部に変わるにあたりチームの最大目標は「関東２部昇格」同好会の頃とは練習日数や内容などががらりと変わり、日が増すごとに部員は減っていき最終的に７人しか残らなかった。
その当時、練習試合をしてもメンバーが足りず、監督やコーチが出たこともあった。
しかしそんな中でも、残った７人でチームのスローガンである「同じ意思、目標を持ち、本気で言い合える集団」のもと、チームの土台を作り上げていった。
その後１年ごとに背伸びをせず現実を直視し目標を定め、２年目は「勝つ喜びを覚える、味わうこと」３年目で「県大学リーグ制覇、北関東制覇、関東選手権出場」４、５年目は「関東で勝つための経験・模索」そして６年目での「関東２部昇格」と１年１年足踏みをせず着実に歩んできた結果、栃木県・北関東を制し、関東大会（関東大学リーグ参入戦）で念願の「関東大学サッカーリーグ」２部昇格を果たしました。
今年度は強豪チームとの勝負。今年の目標はまず、関東リーグ２部残留。
一人ひとりに敬意を払い謙虚な気持ちでプレーに臨み、「部員全員が同じ目標・意思を持ち・野心を抱き・一戦一戦全力で戦いきること」をスローガンに掲げチーム一丸となり、日々の練習に励んでいます。

《２部への挑戦》
作新大にとって２部昇格は、歴史と伝統の始まり。
目標を達成した時点で、選手一人ひとりが「誇り・責任・自覚」を背負ってプレーしなければならない。
その戦う相手は、東海大・青山学院大・専修大・慶應大・早稲田大・拓殖大・東洋大・尚美大・国際武道大・神奈川大・日体大という強豪ばかりだ。
しかし私たちは、本当の勝負の世界に参入したかった。
本当の勝負の厳しさを味わいたかったのも本能だろう・・・
果たして生き残れるか、生き残れないか・・・結果次第で１部に自動昇格あれば、都県リーグに自動降格もあるという厳しい世界だ。
そういった世界でなければ選手達も、成長できない。これは作新大が、今以上の強さを手に入れる為に通らなければならない道であり、選手一人ひとりがひと皮剥けるには必ず経験しなければならない道だと思う。
厳しい戦いを乗り切る為には「肉体的なスタミナ・精神的なスタミナ」が必要となってくる。
長丁場で戦う為に必要な「怪我をしない身体」「22節を戦いきれる身体」を作り上げなければならない。
自分をコントロールし自分を見失ったプレーをなくすことで、「頭の中は冷静に、心の中は熱く」といった、セルフコントロールを心掛けられる選手である事が絶対条件である。
「絶対に勝てる相手はいないが、絶対に負ける相手もいない」という言葉を心に刻み関東リーグに向けて準備した。
目標である関東２部残留を達成するためには、勝ち点を取らなければならない。
関東リーグで戦っていく上で、自分たちのサッカーが通用するのか？手応えを感じられる試合が出来るのか？という思いで一人ひとりが戦いに挑んだ。
関東リーグを戦っていく上で「絶対に見せてはいけない隙を、見せてしまう集中力の無さ」は修正しなくてはいけない重要課題だ。
内容どうこうより結果がすべての戦いである関東リーグに残留するため、自分を犠牲にしてでもという気持ちが一人ひとりに生まれてくることを期待したい。「泥臭く、決して綺麗ではないけど、試合終了の笛が鳴るまで、可能性が１％でもある限り最後まで諦めないサッカー」この言葉どおりの試合が出来れば、結果はついてくるだろう。「作大らしい」試合をして勝ちたい。
結果が問われるこの関東リーグ。前期で勝ち点を奪えなければ後々響いてくるだろう。
格上との対戦が続くが、一戦一線全力で勝利を目指しチーム一丸となって戦っていきたい。

《前期を振り返り・・》
前期を振り返ると惜しい試合ができても勝ちきれないことが多かったように思う。
それはメンタル的なもの、または試合を通して波があるからだと思う。
サッカーというスポーツは、チャンスとピンチがいつも背中合わせにあるため仕方ない部分もあるが、作新大の選手は良いときと悪いときの差が極端すぎる。
大学は大人のサッカーをしなければ勝てない。
大人のサッカーとは悪ければ悪いなりに受け止め戦わなくてはならない。「我慢すること」「与えられた役割をチームの為にプレーする」「いつもいい試合が出来るとは限らない、そんな時は闘争心をみせて戦うこと」「時間にあったプレーをすること」「隙を見せてはいけない、逆に相手の隙をチャンスにする」
それらが出来ず、そのままの悪い流れを引きずり失点してしまい、このままではいけないと気付いた時には手遅れだったり…ということが前期は多かった。
後期、巻き返しをはかり２部残留を果たすためには、この好不調の波を最低限に減らし、パフォーマンスを維持することが必要となるだろう。
そのために、最低限度のことを最大限に努力し選手一人ひとりが、強い気持ちを保ち続けられるようにならなければならない。

《後期に向けて・・》
後期も、厳しい試合展開が予想されるが、最後まで諦めない戦う姿勢を貫き、他チームにこれ以上離されないようしがみついていきたい。
どんな相手にも勝負を最後まで捨てず、戦い抜く姿勢は見せていくつもりだ。
しかし、どんなにいい試合をしても勝ち点を奪わないことには残留は出来ない。
結果がすべての世界に身をおいている以上、結果を残さなくては意味がないのだ。
苦しんで昇りつめたこの舞台で、このまま終われないし終わりにしたくない。
去年、昇格を決めチームみんなで泣き、笑ったあの試合のように最後まで諦めず戦い抜く。
もう１度初心に帰り、残留に向け勝ち点を積んでいきたい。
もともとチャレンジャーの立場なのだから、グラウンドの上でとことん挑戦して欲しい。
挑戦して失敗しても、再び挑戦するような気持ち。そういう気持ちがチームを活性させると思う。
また、今のチーム状態を打開するためには、どんな相手でも目の前の敵にぶつかっていくような気持ちで、「勝負＝サッカー」を楽しむことが必要だ。
だからこそ、結果を怖がらずに勝負して欲しい。勝負することを楽しく感じることが出来れば、結果は付いてくるだろう。

《選手達へ・・》
目の前の敵に絶対に負けない強い気持ちで勝負を挑む。
勝つために何が必要なのか？常に自分と戦ってほしい、

相手よりもまず自分。理屈じゃなく、がむしゃらにボールを追いかける姿勢。
今までの先輩方が残してくれた、雑草のように強くたくましい気持ち。勝つためにひとつになる強い絆。忘れたわけではないのだろうが、表現できていないのが現状である。一人ひとりが何か変わらないといけない。
すべてをかけて挑み、強い気持ちを持ちグラウンドの上でその気持ちを表現してほしい。

《栃木県の仕組図》
栃木県全体をみると、高校サッカー・社会人・栃木SC（JFL）といったように、県内においてこれまでの大学サッカーというものは、あまり公に出ることがなかったように思います。
しかしここ数年で、大学サッカーという存在が明確になってきました。
例えば、北山杯の決勝においても２年連続で大学同士の戦いといったように大学のレベルも徐々に上がってきたのは事実。
更にトヨタカップにおいては、大学の枠を設けて頂いた。
栃木県サッカーにおいての仕組図（小学・中学・クラブチーム・高校・大学・社会人・JFL）が完成しつつある今、県内の「活性化とレベルの向上」を目的とし、中学生・高校生の県外への流出を防ぐことが課題。そのためには、どのようにして魅力ある大学を創り上げられるかが重要になってくる。
今後も、大学サッカーの存在が確立できるよう一生懸命取り組むしだいです。

▲関東大学リーグに参戦の作新学院大イレブン

平成17年度・第79回関東大学リーグ２部　前期戦績表

チーム名	作新大	東海大	青学大	慶應大	拓殖大	東洋大	日体大	専修大	早稲田	尚美大	神大	国武大	勝	分	負	勝点	得点	失点	点差	順位
作新学院大	＼	1●2	1△1	4●5	1●4	0●1	0●2	1●2	0●2	0△0	0●3	1●2	0	2	9	2	9	24	△15	12
東海大	2○1	＼	0●1	1△1	1△1	3○0	2○0	1●3	0●3	0●1	0●2	0△0	3	3	5	12	10	13	△3	10
青山学院大	1△1	1○0	＼	0●1	0●2	2○0	0●1	0●1	1●3	7○1	2○0	4○2	5	1	5	16	18	12	6	5
慶応義塾大	5○4	1△1	1○0	＼	2○0	2△2	1△1	0●1	2○1	1△1	0●4	0●2	4	4	3	16	15	17	△2	7
拓殖大	4○1	1△1	2○0	0●2	＼	1●2	2○1	0●2	0●3	2○1	3●4	0●1	4	1	6	13	15	18	△3	9
東洋大	1○0	0●3	0●2	2△2	2○1	＼	2●3	0△0	2●5	0△0	0●1	0●1	2	3	6	9	9	18	△9	11
日本体育大	2○0	0●2	1○0	1△1	1●2	3○2	＼	1●3	1△1	0△0	2○0	0△0	4	4	3	16	12	11	1	6
専修大	2○1	3○1	1○0	1○0	2○0	0△0	3○1	＼	0●4	0●2	0●1	1●2	6	1	4	19	13	12	1	4
早稲田大	2○0	3○0	3○1	1●2	3○0	5○2	1△1	4○0	＼	3○0	2○1	0●1	8	1	2	25	27	8	19	1
尚美学園大	0△0	1○0	1●7	1△1	1●2	0△0	0△0	2○0	0●3	＼	2○1	2○0	4	4	3	16	10	14	△4	8
神奈川大	3○0	2○0	0●2	4○0	4○3	1○0	0●2	1○0	1●2	1●2	＼	2△2	6	1	4	19	19	13	6	3
国際武道大	2○1	0△0	2●4	2○0	1○0	1○0	0△0	2○1	1○0	0●2	2△2	＼	6	3	2	21	13	10	3	2

日本クラブユース大会関東予選に参加して

栃木SCジュニアユース　主将　　荻原　健太

僕は、栃木県の代表として関東クラブユースの関東大会に出場しました。今年のチームの目標が「クラブユースで関東のレベルを知り、高円宮で全国の敵に勝つ」というものだったので、その目標に向かってチーム一丸となって県予選を勝ち抜き、関東大会に出場することができました。僕達の相手は三菱養和、川崎フロンターレ、ＨＡＮＦＣの３チームでした。
県予選から２週間後に開催となった関東大会。試合前に監督が、「失うものは何も無い」と言ってくれたのでいくらか楽な気持ちで初戦に望めました。初戦の相手は三菱養和。毎年関東大会はもちろん、全国大会にも出場している強豪です。三菱養和は、堅い守りから前線へくさびをＦＷにあてて攻撃を組み立てるというチームでした。なかでもディフェンスラインは非常に強く、ハイボールをいくら入れても跳ね返されてしまい、そのセカンドボールも相手に拾われるという状況の中、自分達のサッカーができないまま前半を終えてしまいました。県予選の時からの課題、立ち上がりの悪さをつかれ失点、すぐ追いついたもののリスタートからまた失点と、完璧に相手ペースの前半。でもベンチでは、前半の一つ一つのプレーの確認など、やるべきことがきちんとできていたと思います。そして後半、先にＰＫで一点を許すものの前半に比べると自分達の特徴であるサイド攻撃も何回かできるようになりました。しかし結果は３対４で負け。一対一の弱さと一つのミスが命取りになるということを思い知らされた試合でした。次の相手は、川崎フロンターレ。Ｊの下部組織だけあって個々のレベルが高いチームでした。初戦で負けている僕達は後がないという状況の中でどのようなサッカーができるのか、精神面での強さも試された試合となりました。０対０で前半を折り返した後半、サイド攻撃から先制。そしてカウンターから得たＰＫで追加点。その後はＤＦ陣が集中を切らず守ってくれたおかげで無失点で試合を終えることができました。内容的にもすごく充実した試合でした。この予選はリーグ戦だったので、この１勝が持つ意味はとても大きかったと思います。予選最終戦のＨＡＮＦＣ戦。引き分けでも次へ進める試合でしたが前半に失点。相手のペースで試合が進む中、前半終盤にロングボールから同点にはしたものの相手に流れを与えたまま前半終了。そして後半、攻めてはいるものの点が入らず、相手のカウンターに苦しめられるという一進一退の攻防。この苦しい状況でも、みんなは締めずに自分の仕事をしていました。ＦＷは前線からの積極的なチェイシングで相手にフリーでボールを蹴らせなかったし、ＭＦはＦＷへのサポートやセカンドボールを拾う、ＤＦは１対１や空中戦などに体を張ってくれ、ＧＫも大きな声でコーチングしてくれたので、なんとか苦しい状況にも耐えることができました。そして迎えた後半の終盤相手のＤＦとＧＫがボール処理に、もたついているすきにゴール。ＦＷのチェイシングそのまま結果となって表れたゴールでした。そしてこのまま試合が終わり、僕達栃木ＳＣは２勝１敗という成績で予選リーグを突破することができました。３戦目のＨＡＮとの試合で取った点はほとんど相手のミスからだったのでどんな相手とやってもサイドから崩して攻めるという共通理解を持ち試合に望みたいです。
　今回、この大会に出場できたことは個人にとってはもちろん、チームにとってもよい経験になったと思います。この経験を経験のまま終わらせず、次への第一歩としてこれからのサッカー人生に生かしていきたいです。そして、関東で唯一Ｊリーグのチームがない栃木県なのでサッカーに対して遅れているとも言われます。その栃木のサッカーに対する他県のイメージを僕達の世代で変えられるよう、努力していきたいと思います。

▲栃木ＳＣジュニアユース

2005年６月17日

関係各位

財団法人　日本サッカー協会

2005年　競技規則の改正

１．競技規則の改正および評議会の決定

第３条　－　競技者の数

その他の試合

現在の文章

その他の試合では、最大６人までの交代を行うことができる。

新しい文章

国際Ａマッチにおいては、最大６人までの交代を行うことができる。
その他のすべての試合においては、次の条件を満たせば、より多い人数の交代を行うことができる。

- 関係チームが最大交代選手数について合意する
- 試合前に主審に通知する

事前に主審に通知されない場合は、または試合前に合意されなかった場合は６人を超えて交代することはできない。

理由
この改正により現在の考え方を明確にする。

日本協会の解説
　この改正によって、その他の試合（親善試合など）において交代できる最大の数を６名までと制限するのは、国際試合のＡマッチに限られることになった。国際Ａマッチ以外の試合では、昨年の競技規則の改正における日本協会の解説と同様の考え方で行われることとなった。すなわち、「日本協会傘下で行われる親善試合（国際Ａマッチ以外の試合）では、その試合の目的そして開催時期の天候など様々な違いがあることから、それぞれの競技会規定に従うこととした。」に基づいて交代の数を決定することになる。ただし、条文中にある交代における２つの条件を満たしていなければならない。

第３条　－　競技者の数

違反と罰則

項目３

現在の文章

プレーを停止したときにボールがあった地点でボールをドロップしてプレーを再開する

新しい文章

プレーを停止したときにボールがあった地点から、間接フリーキックでプレーを再開する

理由
　これは、承認なしにフィールドに入った交代要員のチームの反則であると考えられ、間接フリーキックで罰せられるべきである。

日本協会の解説
　チームの交代要員が主審の許可なしにフィールド内に入った場合、これまでは観客や犬などと同様に外部からの要因による出来事と考えられていたため、プレーの再開方法は主審がプレーを停止したときにボールがあった地点からのドロップボールであった。
　しかし、交代要員は単なる外部からの要因ではなく、チームの役員とも区別をして、プレーに関わるチームの一員であると考えるべきとの解釈である。したがって、主審の許可を得ない、交代要員によるフィールドへの無断侵入に対してはチームへの罰則として、相手チームに間接フリーキックが与えられることになった。ただし、罰則の適用に当たっては、主審はアドバンテージの適用を考慮しなければならない。

第５条　－　主審

主審の決定

現在の文章

主審は、プレーを再開する前ならば、その決定が正しくないことに気付いたとき、または主審の判断によって副審の助言を採用したとき、決定を変えることができる。

新しい文章

主審は、プレーを再開する前、または試合を終結する前ならば、その直前の決定が正しくないことに気付いたとき、または主審の判断によって副審の助言を採用したときのみ、決定を変えることができる。

理由
　主審が、笛を吹いて試合を終了させた後に副審のシグナルを見たというような状況が実際にフランスで発生したが、このような状況に対応するため競技規則の条文を明確にする必要があった。

日本協会の解説
　例えば、主審が一方のチームの得点を認めた後に副審からの合図に気づき、攻撃側選手の反則によって得点が無効であることを知った場合、相手チームにキックオフをさせる前ならば、得点を取り消し、反則によるフリーキックでプレーを再開させることができる。しかし、キックオフによる再開をさせてしまった後ならば、得点の決定を変えることはできない。このように、どの時点までなら主審は直前の決定を変更することができるのかを明確にしている文章だが、主審が試合を終結させる（前、後半、延長前半、延長後半）の場合についても明確にする必要があった。
　フランスで実際に起こった事例は、主審が試合終了の

を吹いたにもかかわらず、副審が旗を上げ続けたことで混乱が起きたというものであり、現在の条文には終了時（前、後半、延長前半、延長後半）の取り扱いには触れておらず盲点ではあった。
　なお、「試合の終結」とは、フランスで起こった事例から、「試合終了と前半および延長前半の終了の笛」を意味するものである。

第１１条　－　オフサイド

新しい国際評議会の決定事項

国際評議会の決定事項

決定１

オフサイドポジションの定義における“相手競技者より相手ゴールラインに近い”とは、頭、体または足のどこの部分であってもボールおよび後方から２人目の相手競技者より相手ゴールラインに近いことを意味する。手と腕はこの定義に含まれない。

理由
　サッカーは、頭、体および足で競技されるものである。もしこれらが相手ゴールラインより近かったならば利益を得る可能性があるが、ただ単に手と腕だけが相手競技者より前方にあっても利益を得ることはない。

日本協会の解説
　ボールより前方にいる攻撃側の選手が「後方から２人目の守備側競技者より相手ゴールラインに近い。」、言い換えれば「オフサイドポジションにいる。」とは、これまでは、厳密な定義が明示されていなかった。指導と実践の上では、「身体の中心点を相手の身体の中心点と比較して前方にいるか否か」を判断していた。今回の改正で理由に挙げてあるように、手と腕を除いて身体の最も前方に出ている部分の面（点）を比較してオフサイドポジションにいるか否か判断することになったのは、理論上は明確になったと言える。

決定２

オフサイドポジションの競技者が次のような行動で積極的にプレーに関わったと主審が判断したときオフサイドの反則とする。

①**プレーに干渉した**・・・実際にボールをプレーするかまたはボールに触れる。
- 相手競技者への干渉が考えられないケースでは、副審はプレーへの干渉のみを考えて競技者がボールをプレーするか、触れるまで旗を揚げることを待つ。
- これまでは、その競技者のプレーへの干渉が明らかであると副審が考えたときに旗は揚がっていた。

②**相手競技者に干渉した**・・・ボールの進む方向に位置して、動く、プレーのそぶりをして、相手の視線を遮る、相手の動きを邪魔する、相手を欺く、相手を惑わせる。
- オフサイドポジションの競技者の位置や動きが相手競技者のプレーに影響を与えている、と副審が判断したときに旗を揚げる。
- オフサイドポジションの競技者が単にボールを追うことは、プレーではない。また守備側の競技者が単に相手を追走することは、自然の行動であり、オフサイドポジションの競技者が影響を与えているわけではない。
- オフサイドポジションの競技者が相手の動きを妨害したり、惑わせたりするような動きをした場合に相手競技者を干渉したと判断する。

③**オフサイドポジションにいたことで利益を得た**・・・相手守備者、ＧＫ、ゴールポスト、クロスバーなどからボールが跳ね返ってオフサイドポジションの競技者にわたる。

※上記の条件でオフサイドの反則が成立するが、個別に反則が起こる機会は大変に少ない。プレーの中ではこれらの状況が複合的に起こり、特に①と②のケースが同時に起こっていることが多い。したがって、副審の旗を揚げるタイミングはさまざまであることを理解されたい。

以上

理由
　オフサイドは、これまで２シーズン以上にわたりこの定義に基づき判断されてきたが、９月に開催された国際評議会事務会議で解釈が承認された。この定義はその解釈に基づき修正されたものである。この国際評議会決定は、正しい認識を競技規則上に記載するものである。

日本協会の解説
　2003年の９月に開催された国際サッカー評議会の年次事務会議において、「オフサイドの判定に関する解釈」が決定され、国際サッカー連盟の回状874号にて加盟協会に通達されている。本協会では、その必要性から競技規則の日本語版付録に掲載（135ページ）してきた。今回の改正によって若干の言葉の修正が加えられ、第11条オフサイドの条項の国際評議会の決定事項・決定２として新しく明記された。当初の通達にもあるように、この解釈は競技規則の改正ではなく、現行の競技規則の記述にすべて従ったものであり、この解釈の目的は競技規則の尊重とサッカー競技の最終目標である得点を目指す攻撃的なプレーを保護するものである。

第１２条　－　ファウルと不正行為

懲戒の罰則

現在の文章

競技者または交代要員あるいは交代した競技者のみにレッドまたはイエローカードを示す。

新しい文章

競技者または交代要員あるいは交代した競技者のみにレッドまたはイエローカードを示す。
主審は、フィールドに入ったその時から試合終了の笛を吹いた後フィールドを離れるまで、懲戒の罰則を行使する権限をもつ。

理由
　主審がレッドカードやイエローカードを示す時期を定義づけることは重要なことである。これによって、試合終了の笛の直後にフィールド上で発生した出来事に対してカードが示すことができるようになり、現在の単なる報告より、より効果的である。

日本協会の解説
　この項では、主審が、レッドまたはイエローカードを示すことができる対象者について明記しているが、改正によって、これらの懲戒の罰則を主審が行使できる開始の時期と終了の時期が追記された。試合が開始されるキックオフの前であっても、主審はフィールド（フィールドとは、タッチラインとゴールラインで囲まれた部分を示す。ピッチとも表現されている）に入った時点から懲戒の罰則を行使できる権限を有するが、試合終了の合図（笛）をした後でも主審がフィールドを去るまでは同様の権限を有していることが明確になった。すなわち、主審が試合を終了してフィールドを去るまでの間に、競技者あるいは交代要員に退場または警告に値する行為があった場合は、レッドあるいはイエローカードを示すことができ、審判報告書の退場または警告の欄に記載することになる。したがって、単なる重要事項での報告ではなく、競技者や交代要員に対する罰則の重みが増すことになる。
　なお、競技規則の日本語版付録には、「主審の競技規則を施行する権限の開始と終了」について日本協会審判委員会の見解を示してきたが、今後はこの項の新しい文章に従うものとして削除した。

第１２条　－　ファウルと不正行為

決定４

現在の文章

相手の安全に危険を及ぼすような後方からのタックルは、著しく不正なプレーとして罰せられる。

新しい文章

相手の安全に危険を及ぼすようなタックルは、著しく不正なプレーとして罰せられなければならない。

理由
　後方からだけでなく側方や前方からのタックルであっても、相手を傷つける、または相手を傷つけてしまうかもしれないタックルは著しく不正なプレーとして罰せられなければならない。

日本協会の解説
　これまでは、競技者の安全を保護するために、特に競技者が無防備である後方からのタックルを厳格に罰するようにとの文章であった。今回の改正文章によって、退場処分とすべき、著しく不正なプレーは、後方からのタックルだけではないことが改めて強調されていることを認識しなければならない。

第１４条　－　ペナルティーキック

違反と罰則

ペナルティーキックを行う競技者の競技規則の違反：

項目３

現在の文章

ボールがゴールに入らなかった場合は、キックを再び行わない。

新しい文章

ボールがゴールに入らなかった場合、主審はプレーを停止し、守備側チームの間接フリーキックで試合を再開する。

　キックを行う競技者の味方競技者がペナルティーエリアに入る、ペナルティーマークより前方に動く、あるいはペナルティーマークから9.15m（10ヤード）内に入ったとき：

現在の文章

ボールがゴールに入らなかった場合は、キックを再び行わない。

新しい文章

ボールがゴールに入らなかった場合、主審はプレーを停止し、守備側チームの間接フリーキックで試合を再開する。

訂　正　前

あるいは跳ね返った時点でプレーを止め、そのときボールのあった地点から、守備側チームの間接フリーキックで試合を再開させることになる。

訂　正　後

あるいは跳ね返った時点でプレーを止め、違反のあった地点から、守備側チームの間接フリーキックで試合を再開させることになる。なお、複数の攻撃側の競技者が違反をした場合は、主審の判断により著しく違反をした競技者の位置から再開させることになる。

日本協会の解説
　この条項には、主審がペナルティーキックを行う合図をして、ボールがインプレーになる前に、攻撃側の競技者が行う違反、守備側競技者が行う違反、そして両方の競技者が行う違反と区別してそれぞれの罰則が整理されている。しかし、その中でも特に、ペナルティーキックを行う競技者（キッカー）の違反とキッカーの味方競技者による違反、すなわち、攻撃側の競技者による違反に関しての条文に不明瞭なところがあったため、新しい文章のとおり改正された。ペナルティーキックが行われた後、ボールがゴールに入らなかった場合とは、
　１）そのままフィールドの外に出て、ゴールキックになる。
　２）ゴールキーパーが保持する。
　３）ゴールキーパーがはじきフィールドの外に出て、コーナーキックになる。
　４）ゴールポスト、クロスバーまたはゴールキーパーからフィールド内に跳ね返る。
　などの状況があり、特に３）と４）については解釈が明確になっていなかった。１）と２）についてはアドバンテージを適用して、１）ゴールキックで再開、２）プレーを続けさせることでよいが、３）と４）についてはボールがはじかれた、あるいは跳ね返った時点でプレーを止め、違反のあった地点から、守備側チームの間接フリーキックで試合を再開させることになる。なお、複数の攻撃側の競技者が違反をした場合は、主審の判断により著しく違反をした競技者の位置から再開させることになる。

第１５条　－　スローイン

進め方

現在の文章

ボールが投げ入れるとき、スローアーは：
●フィールドに面している
●両足ともその一部をタッチライン上またはタッチラインの外のグランドにつけている
●両手を使う
●頭の後方から頭上を通してボールを投げる

ボールが他の競技者に触れるまで、スローアーはボールを再びプレーしてはならない。

ボールがフィールドに入った瞬間にボールがインプレーとなる。

新しい文章

ボールが投げ入れるとき、スローアーは：
●フィールドに面している
●両足ともその一部をタッチライン上またはタッチラインの外のグランドにつけている
●両手を使う
●頭の後方から頭上を通してボールを投げる

ボールが他の競技者に触れるまで、スローアーはボールを再びプレーしてはならない。

すべての相手競技者は、スローインが行われる地点から少なくても２メートル離れる。

ボールがフィールドに入った瞬間にボールがインプレーとなる。

理由
　スローインの際、ほぼタッチライン上に両足をおいてスローインをするスローアーの直前に相手競技者が立つ傾向が増大している。これは第１５条に反しているわけではない。しかし、疑いもなくスローアーがスローインをし終えることを妨害している。さらに、両競技者間での争いごとが広がっていくことにもなりかねない。
　現在、プレーの開始、再開時に規定の距離を離れる必要がない場合はドロップボールとスローインのみである。この案によってスローインも他の競技規則と合致させることになる。多くのメンバー協会がこのような状況に対して非公式に規定の距離を課しているのが実態である。この改正案が示されたことによって競技規則適用の標準化を確保することになる。

２．通知

第１２条　－　ファウルと不正行為

　新しい評議会の決定とするべく、次の提案がFIFAから提出された：
　いったん主審がフリーキックを与えるために試合を停止した後、ファウルを犯したチームの競技者がプレーの再開を遅らせるために意図的にボールに触れたと判断されたならば、イエローカードをもって罰しなければならない。この罰則は、スローインまたはコーナーキックが相手チームに与えられたときにボールに触れた競技者、また、競技者のチームが得点した後ボールをゴールネットから取り去った場合（相手チームのゴールキック）にも適用される。

理由：
　明確なガイドラインを示し、ボールを数秒間抱える、あるいは遠くに投げることでプレーの再開を遅らせ、これによって守備側競技者のポジションを確保しようとする反スポーツ的戦術を止めさせなければならない。また、競技者がボールを争って取り合うとすることも止めさせなければならない。

　評議会はFIFAがオランダで開催されるFIFAワールドユース選手権大会およびペルーのFIFA Ｕ－17世界選手権大会でこの提案を試行することを認めた。FIFAは次の年次総会で試行結果を報告する。

ボール：
　評議会は、FIFAがペルーでの2005FIFA Ｕ－17世界選手権大会、日本でのFIFAクラブワールドチャンピオンシップトヨタカップジャパン2005時に新しいゴールラインボール技術の実験をすることを承認した。FIFAは、今後の会議の場において、この実験結果について報告する。

日本協会の解説
　ＦＩＦＡより、以上の２件が国際サッカー評議会年次総会において提案され、試行あるいは実験という形で行われることが承認された。これらの結果報告を受けて、次回の年次総会または今後の会議において協議されることになろう。

ゴールキーパー保持についての適用（通達）

●ゴールキーパーがボールを弾ませている場合、相手競技者は危険なプレーの反則を犯していなければ、ボールがグラウンドに触れたときにボールをプレーしてもよいか？

2004年：プレーできる

2005年：プレーできない

●ゴールキーパーがボールを保持した後、手の上にボールを置いた。相手競技者は後ろからやってきてゴールキーパーの手の上のボールをヘディングした。これは許されるか？

2004年：相手競技者は危険な方法でなければ、ヘディングでボールをプレーできる

2005年：プレーできない

日本協会の解説
　これらの２件の適用は、前回通達した内容と全く反対の考え方となった。FIFAによる朝令暮改の感は免れないが、これらのプレーは再度「危険な方法でプレーしている」として判断され、「プレーできない」ことになった。

　競技規則の改正は、2005年７月１日から効力を発することになり、指示および指令は即時効力を発する。

国際サッカー連盟
事務局長　ウルス・リンジ

JFAプリンスリーグ　U-18関東2005

JFA プリンスリーグU-18関東2005　Aグループ

チーム名	ヴェルディ	弥栄西	浦和東	韮崎	矢板	ｱﾝﾄﾗｰｽﾞ	前育	八千代	市船	桐光	勝点	勝	分	負	得点	失点	得失	順位
ヴェルディユース	＼	3○0	7○3		7○0	3●5		0●3		2○0	12	4	0	2	22	11	+11	4
弥栄西高校	0●3	＼		0△0		4○0	1●2	1△1	1●5		5	1	2	3	7	11	- 4	8
浦和東高校	3●7		＼	2○1	2○1		1○0	3○1		2△2	13	4	1	1	13	12	+ 1	3
韮崎高校		0△0	1●2	＼		0●3	0●2		1○0	3○0	7	2	1	3	5	7	- 2	7
矢板中央高校	0●7		1●2		＼	0●3	0●1		0●6	1●2	0	0	0	6	2	21	- 19	10
鹿島ｱﾝﾄﾗｰｽﾞﾕｰｽ	5○3	0●4		3○0	3○0	＼		0●2	0●1		9	3	0	3	11	10	+ 1	5
前橋育英高校		2○1	0●1	2○0	1○0	＼	＼	3○1		3○1	15	5	0	1	11	4	+ 7	2
八千代高校	3○0	1△1	1●3			2○0	1●3	＼	0●3		7	2	1	3	8	10	- 2	6
市立船橋高校		5○1		0●1	6○0	1○0		3○0	＼	1○0	15	5	0	1	16	2	+14	1
桐光学園高校	0●2		2△2	0●3	2○1		1●3		0●1	＼	4	1	1	4	5	12	- 7	9

▲矢板中央高校 対 鹿島アントラーズユース（白）の熱戦から（壬生町総合公園にて）

新たな出発！

創立100周年を迎えるにあたり、平成17年４月１日から校名を「青藍泰斗（せいらんたいと）高等学校」に変更しました。この校名には、未完成ではあるが瑞々しく生命力溢れる若者たちが、その生涯をかけて自己実現のために、何か一つのことに誠実に勤勉に専心し、その道でなくてはならない存在になってもらいたいという願いが込められています。そして本校サッカー部は、まだ部員19名のチームですが、戦う気持ちだけは負けないよう日々練習に取り組んでいます。
「せいらんたいと」をよろしくお願い申し上げます。

▲青藍泰斗高校サッカー部

ゴールキーパー講習会に参加して

宇都宮高校サッカー部　佐藤直道

私は、平成17年２月13日に県総合運動公園で行われたＧＫ講習会に参加しました。講師は、有名なＧＫシジマール氏ということでとても楽しみにしていました。私は、中学３年生になる少し前からＧＫを始めたので、経験が浅く、この機会に他のＧＫから少しでも技術を盗もうと思っていました。

当日グランドに着くと、各自でストレッチやアップをしました。多くの学校から参加者が集まっていて、私は「ＧＫだけでこんなに集まるなんて・・・」と一人で思っていました。学校によって、多種多様のアップを行っていて、私は同じ学校から参加した友人と「今度あのアップを取り入れてみよう。」などと、話していました。

講習会が始まり、アップを兼ねて行われたハイボールキャッチでは、「１cmでも高く、１mmでも高く」という指示が飛び、皆懸命にジャンプしていました。その後に行われたダイビングでは、「ボールに対して一直線に、最短距離を跳ぶ」という、当たり前だが、意外とできていないことを注意されました。

シジマール氏は、ボールを取りこぼすことに関してとても厳しく、参加者が取りこぼすたびに大声を張り上げていました。しかし、おそらくポルトガル語だったので、何が悪かったのかわからず、微妙に戸惑っている人もいました。

練習のメインとなったのは、前方へのダイビングとジャンプなどを組み合わせたもので、全員が汗だくになりながらメニューをこなしていました。私は、この練習で、ダイビングの踏み切り足が合わなかったので、別メニューで修正しました。普段の練習では気づかなかったことに気づき、勉強になりました。

最後は、「ハイボールキャッチ→スローイング」と「シュートストップ→ロングキック」と流れのある練習を行いました。シジマール氏は、終始、「ゴールを許しては行けない」と言っていました。

今回の講習では、基礎的なことからメンタル的なことまでいろいろと勉強になりました。ただ、あまりに参加者が多すぎて、細かい指導を受けられなかったのは少し残念でした。

ＧＫはサッカーの中でも特別なポジションなので、このような機会がより増えてくれれば良いなと思います。

▲熱心に見守る各チームのＧＫと指導者たち

▲シジマールから直接指導を受ける選手

関東フットサルリーグ参入戦でYUZUHAが健闘

2005年６月から開幕した「第７回関東フットサルリーグ」の参入戦が３月５、６日、宇都宮市の清原体育館で行われ、関東各県の代表８チームが１つの昇格枠を懸け熱戦を展開しました。本県からは第２回栃木県社会人フットサルリーグで初優勝したYUZUHA FUTSALが出場しました。

１回戦でYUZUHAは、EstrelaFutsalClub／F-NET（埼玉２位）と対戦。YUZUHAは前半７分、相手に一瞬のすきを突かれ失点を許しますが、直後に敵陣中央を抜け出た福島勇佑選手が同点ゴール、試合を振り出しに戻しました。前半、さらに１点を失ったものの、田中純一選手、代田聡選手らが攻撃の起点となり、再三、相手ゴールに迫りました。その後もYUZUHAは粘り強いプレーで、互角以上の戦いを見せましたが、追加点を挙げられず、反対に後半13分に相手に１点を献上、１－３で敗退しました。

大会は、強豪チームとの対戦で勝負強さを見せたSALVAT ORESORA（茨城１位）が優勝。参入戦群馬会場の優勝チーム・ボツワナ（東京１位）とともに関東リーグ昇格を決めました。

現在、社会人フットサル界にはＪリーグ、JFLのような全国リーグがなく、実力的には関東フットサルリーグが最高峰リーグといわれています。当然、そのリーグに入るための参入戦も、高いレベルにあり、過去に本県勢は苦戦を強いられてきた歴史があります。しかし今回のYUZUHAの健闘は、本県フットサル界において、「関東リーグ昇格チーム誕生」を予感させる戦いとなりました。選手のみなさん、お疲れさまでした。

（栃木県フットサル委員会　　桜井　誠）

▲参入戦で健闘したYUZUHA

クラブ選手権に初優勝して

ＦＣ足利ラトゥール監督　　中山　芳寿

年当初チーム目標のひとつに、クラブ選手権優勝を掲げました。大きな目標でしたが、選手達の頑張りでその目標を達成することができました。ラトゥールの選手は、全員が足利出身の無名の選手ばかり。でもチームワーク等で技術差を補い、優勝できたことで感慨もひとしおです。チーム立ち上げ当初、他地区の巧いチームを見て『サッカー先進国に挑む日本の戦いに似てるなぁ』と思ったものでした。今現在の技術の差を、何とかして埋める方法は無いものかと試行錯誤していたとき、技術委員として大橋監督のもと国体メンバーのプレーを間近で見る機会に恵まれ、多くのことをチームに持ち帰ることができました。またラトゥールの選手は、巧い選手は少なかったのですが、全員がサッカーが大好きで、真面目な選手達ばかりでした。そのため戦術理解力と、それを実行する意欲が非常に高かったことも、今回の結果に結びついたと思っています。

「熱くフェアに戦う！」を合言葉に戦っているラトゥールですが、準決勝と決勝で計３枚のイエローカードをもらってしまったことが悔やまれます。チームでやるべきことが崩れたときに、ラフなプレーが出てしまうということがわかりました。10月の関東大会でも、格上の相手にどう戦えるか、栃木の代表として恥じない試合をして来たいと思います。

最後に、各方面で熱い声援を送って頂いた方々に、この場を借りて心より感謝を申し上げます。

▲喜びのイレブン（撮影：若目田　崇行）

クラブチーム栃木大会　総評

大会運営責任者　　天満屋　庄三

今年度の全国クラブチーム選手権栃木大会は、４６チームの参加申込がありましたが、組合せ抽選の当日に欠席があり、実質４５チームの山組みとなりました。主会場が芳賀地区となって４年目。参加チームも増し、新規登録チームも参加が認められているので、総務担当はその分多忙となりました。本大会の運営任務を理解できていないチームがありました。代表者会議に出席した方が大会の主旨内容をメンバー全員に伝えていないのです。

ですから
試合時間に遅れる・・・・
審判担当チームの自覚がうすい・・・・
会場変更で場所が遠くなったから棄権する・・
個人登録カードがない・・・・
選手のマナーが良くない・・・・
審判技術がしっかりしていない・・・・

さすがに３回戦あたり、そしてベスト８からは違いがみられました。
チームとしてのまとまり、監督及び選手のマナーそして行動姿勢が立派です。
又、技術力の差がありません。勝利の女神がどちらに微笑むかで決まりました。
特に３回戦では新旧対決の東山ＦＣ対粟野クラブは見ごたえがありました。
又、足利ラトゥール対藤岡ＳＣは事実上の決勝戦と感じました。
準々決勝では東山ＦＣ対落合ＳＣ２００２はすばらしいゲーム内容でした。
審判団も審判冥利に尽きることでしょう。
決勝戦は予想に違わぬ好ゲームでした。一日の長の差で足利ラトゥールが優勝をもぎ取った感じです。この大会に関わった全ての方々、お疲れ様でした。

▲グリーンスタジアムでの熱戦（撮影：若目田　崇行）

国体Ｖ３に向かって

国体成年男子監督　　大橋　広

先日、奥澤さんより「国体Ｖ３に向けて」というタイトルで原稿を依頼された。今までサッカー栃木に原稿を寄せた機会は４～５回はあったと思うが、いずれの時も大会を終了した時に、その大会を振り返った形式での原稿だった。大会前に原稿を依頼されるということは、かなり結果を期待されているものと感じる。体育協会の方々やサッカー協会の人たちと会うと、３連覇よろしく頼むというような内容のことをよく言われる。その中には勝って当然というような雰囲気さえ感じることもある。しかし、サッカーはそんなに甘くないはずだ。他県のターゲットになることはもちろんだが、昨年までのチームから中盤の選手が抜けてしまい、今年は新しいメンバーで中盤を構成しなければならない。静岡、埼玉での２連覇した頃のチーム力と、今年のメンバーの現在の力を比較すると７０％～８０％程度の力しかないように感じる。何年間も高いチームポテンシャルを維持することは、本当に難しいなと感じる。このままでは関東予選でさえ勝ち抜けるかどうか、確固たる自信があるわけではない。何とか８月の予選までに、チーム力をアップしなければならない。練習会や試合を重ねて選手個々の能力（判断力やコミニュケーションスキル）を高めて行くことはもちろんだが、短期の選抜チームなので誰をどこで使うのか、非常に難しい采配になりそうだ。今年は中盤の選手起用が勝利の鍵となるだろう。チームを勝たせるために、自分も指導者としてもっとレベルアップしなければならないなと考えていた時、ＪＦＡのヨーロッパ指導者研修の募集があったのでそれに参加した。期間は６／１２～１８オランダとドイツでＵ－２０のトレーニング視察とワールドユースとコンフェデレーションズの試合を観戦し、それを分析するという内容の研修会だった。Ｊリーグ関係者や各県の指導者等が参加していて、試合内容や分析結果について活発な意見交換があり、ハードスケジュールだったがとても有意義な時間を過ごせたように感じた。少しはレベルアップできたかな？と思う。８月の関東予選まで２ヶ月を切ったが、ベストを尽くして岡山国体のキップを手にできるようにしたい。狸の皮算用にならないように気を引き締めて、一試合一試合を大切に戦う事。それだけを考えて行きたい。関東予選を突破したとき、国体Ｖ３の姿は朧げに見えてくるのであろう。

国体・トレセン改革

技術強化委員長　　菅谷　昌広

来年度の兵庫国体より、国体の少年の部がＵ－１６化となることが正式に決定した。以前からいろいろな場面で話題にはあがっていたが、いよいよという感じである。この改革の主なねらいは、受験によるブランクのある中学３年生や試合への出場機会が少ない高校１年生の公式戦への出場機会の確保である。これに伴い、予選方式の変更およびトレセンの改革が早急に進められることになる。現在、関東の技術委員会で検討されているのは、国体予選へのリーグ戦の導入である。関東の８都県を４都県ずつに分け、４月・５月・７月にリーグ戦を行う。その後、現在の関東ブロック予選の時期にリーグ戦の順位に応じた変則的なトーナメント戦を実施し、本大会への代表を決定する方法である。この方式が採用されると、今まで以上に早い段階から国体を視野に入れた準備が必要になってくる。すなわち、各県のジュニア世代からの選手育成の質が問われることになるのである。栃木県としても、第２種と第３種・第４種が連携をとり、選手の育成・強化に取り組んでいかなければならない。

改革は国体ばかりではなくトレセンにもおよんでくる。国体予選のリーグ戦を行う日を含んだ年間１０日程度を、関東のトレセンマッチデーと位置づけ、国体予選終了後も各県のＵ－１６トレセンどうしの試合を定期的に行う。さらに、それらのマッチデーには各県では公式戦や練習試合を行わず、地区のトレセンどうしのリーグ戦を実施する。また、トレセンではただ試合をこなすのではなく、Ｍ－Ｔ－Ｍ（マッチ－トレーニング－マッチ）方式を導入し、理想的には週１回のトレセンデーを設け、試合での課題を修正することが、ＪＦＡより提案されている。技術強化委員会では今後の栃木県および各地区のトレセンの運営について、それぞれの指導者と話し合いをもち、来年度に向けて準備を進めているところである。登録チーム指導者にも趣旨をご理解いただき、ぜひご協力願いたい。

《栃木県トレセンコーチ各地区担当》

◇宇河	御子貝和亮	◇芳賀	篠崎　佳昭
◇上都賀南	大牧　　稔	◇上都賀北	田村　晃一
◇那須北	大蔵　　裕	◇那須南	津守　直人
◇両毛	糸井　悦夫	◇塩谷	保坂　光雄
◇下都賀	楠瀬　直木・川上　栄二		

私とサッカー、私と審判

県内最年長審判　　笹沼　設夫（旧姓鈴木）

▲筆者近影

私がサッカーに足を踏み入れたのは、宇都宮市立陽北中学校に入学してから。入学の時、クラスの友人に誘われて入部した。以後、宇都宮工業高校で３年間サッカー部に在籍し、サッカーに明け暮れた。その間、昭和３１年１月兵庫・西宮球技場で行われた第３４回全国高校選手権大会で３位に入賞した。図らずも１年生で「ＣＦ」として出場した。卒業後は、社会人チーム「宇工蹴友会」のクラブの一員として、十数年間選手として関わってきた。この間、何度か審判の真似事はやったが、仕事の関係でサッカーとは縁が切れていた。今は、サッカーは私の生活に「なくてはならないもの」となってしまったが。

家庭を持ち、長男が「錦スポーツ少年団」に入部した。その時チームの帯同審判員として４級審判の資格を取得した。翌年の昭和５８年２月、３級審判となった。審判を始めた当時は、少年団の試合における審判員の服装は統一されておらず、大変乱れていた。特に、夏場の帽子着用、冬場の防寒コートの着用が目立っていた。審判の初心者である私が、諸先輩に指導など出来るはずもない。私は、割り当てられた審判を行う時に、規定の服装を着用することを実行し、無言の指導をした。最近の試合では、審判員の服装も統一されてきて、もう指導する必要が無くなった。

審判資格取得後は、山田新吉、奥澤浩、加藤照夫氏など栃木県を代表する方々の指導を受け、積極的に審判活動を行った。少年から社会人までの試合に審判員として関わり、現在まで「１０００試合を越える」審判を務めてきた。平成８年度には、多くの人達のお陰で「第１回栃木県３級審判功労賞」の栄誉を浴することが出来た。

審判活動も少年、中、高、社会人、シニアと３０年近くに及んだ。その間、アキレス腱断裂、脳血栓など大きなアクシデントを経験したが、持前の気力で全て克服してきた。現在は「大昭サッカークラブ（シニア）」の帯同審判員として活動している。

県内の審判員も国際主審、国際副審、１級、２級と数多くの優秀な人材を輩出して、アジアで、全国で、関東で活躍している。次回のワールドカップやオリンピックでは主審、副審の指名を受けて、世界の舞台で実力を発揮されることを願っています。上級を目指している方々は、諸先輩の指導のもと、各々の努力で確実にチャンスを掴み、先人の果たせなかった夢を、是非とも叶えてもらいたい。

県内の全審判員の活躍を祈っています。頑張って下さい。私も頑張ります。　　（平成１７年６月３０日　記）

●笹沼さんは、現在病気療養中で「悪戦苦闘」しております。皆様方の暖かい励ましを、お願い致します。　（編集部）

２級審判員になって

橋本　静夫

私は、２００４年１０月に無事２級審判員に合格することができました。私が、３級審判員になったのは、今から１６年前のことで、ここまでの道のりは、かなり長いものとなってしまいました。

３級審判員となって１０数年間、私は、時々割り当てられる県社会人大会の審判を無難にこなし、好きなサッカーと関わり合うことができるということだけで満足していました。しかし、数年前からもっと活動の場を広げたい、現状に満足することなく、もっとより良いレフェリングをしたいと考える様になり、上級審判昇格への努力を始めました。

まずは、体力面の強化をしました。今までのトレーニングは、現状維持のためのものでしたが、自分を追い込む練習も取り入れました。疲れたからもうやめようと思ったときは、『選手がトレーニングをして試合に臨んでいるのに、審判員が何もしないで試合に臨んでいては、選手の皆さんに申し訳ないじゃないか。』という恩師の言葉を思い出し頑張りました。

メンタル面の強化は、県内の大会に進んで参加することにより、経験を積ませて頂きました。また、特別に参加させて頂いた“韮崎フェスティバル”における関東の研修会は、私にとって大きな自信となりました。特に、国際女子主審であり、１級審判員になられた大岩真由美氏の副審として、また自分が笛を吹き大岩氏にアシスタントレフェリーをして頂くなど、滅多にできない貴重な経験をさせて頂きました。そして、インストラクターの先生から、『たとえ副審が自分より上級であっても、主審は自分なのだから遠慮せず、自信をもってやりなさい。』というアドバイスを頂き、主審としての心の強さと、自信をもつことを教えて頂きました。

技術面では、特に“宇都宮社会人ナイターサッカー大会”への参加が大きかったように思います。試合終了後に毎回行われる反省会では、インストラクターの先輩方や仲間の皆様からアドバイスを頂き、たいへん勉強になりました。

２級審判員になった今、その重みを感じながら日々を過ごしています。当たり前のことではありますが、ワッペンの色が変わっても、自分の審判技術が急に向上したわけではないので、気を引き締めて謙虚な気持ちを忘れずに、今後も審判活動に取り組んで行きたいと思います。

最後になりましたが、これまで御指導下さった関係者の皆様、仲間の皆様に深く感謝いたします。そして『自分の取り組んでいる事が好きであること。その気持ちがあれば、当然今の自分より上に行きたいと思うようになる』という恩師の言葉を忘れずに、今後もより一層の努力をしていきたいと思います。

▲　大岩氏と筆者（右）韮崎フェスティバルにて

～地区だより～

７月31日（日）、鹿沼市運動公園において「第18回鹿沼市サッカーフェスティバル」が開催されました。好天にも恵まれ、幼児から社会人までゲームやＰＫ大会など、楽しい汗をかきました。
鹿沼市では、（財）日本サッカー協会の助成により（仮）鹿沼市サッカー場の整備事業がまもなく着工の予定です。県内初の人工芝サッカー場や公営のフットサル場が整備され、今後、本県サッカーの拠点として大いに期待されています。

▲開会式でのひとこま

▲挨拶する森山・県サッカー協会長

▲少年達の元気なプレー

▲レディースによる熱いＰＫ戦

▲阿部市長を囲んで記念撮影

～2002 FIFA ワールドカップ™記念事業～
JFA フェスティバル開催予定

- **ガールズサッカーフェスティバル**
  - ・2005年10月８日（土）　宇都宮市石井緑地サッカー場
- **キッズサッカーフェスティバル**（U-6）
  - ・2005年10月29日（土）　栃木県グリーンスタジアム
- **キッズサッカーフェスティバル**（U-8）
  - ・2005年11月13日（日）　栃木県グリーンスタジアム
- **レディースサッカーフェスティバル**
  - ・2006年１月29日（日）　栃木県総合運動公園サッカー場
- **ファミリーサッカーフェスティバル**
  - ・2005年９月11日（日）　栃木県グリーンスタジアム
  - ・2006年３月21日（火・祝）　栃木県グリーンスタジアム

※　詳細は県協会ホームページに掲載予定です。

URL　http://www7.ocn.ne.jp/~tfa

平成17年度　（社）栃木県サッカー協会賛助会員御芳名（敬称略）

日立栃木サッカー部後援会
栃木信用金庫
Forty Six 壬生後援会
FC道楽後援会
栄研化学サッカー部後援会
小松本孝寿
緑川弘信
栃木教員FC後援会
FC真岡21後援会
Free Style後援会
十河大介
花王FC後援会
ジェイ・バス株式会社
川原井　諭
室井浩一
YFC 21後援会
曽雌晶教
今市JSC後援会
FCあわのレジェンド後援会
八木沢弘光
落東アスリート後援会
フットボールクラブ部屋後援会
大山フットボールクラブ後援会
FC佐野後援会
佐川野FC後援会
奥澤直人
北押原FC保護者会
小野寺北小サッカークラブ後援会
七合SC後援会
揚茜ブラザーズ後援会
揚茜クラブ後援会
豊北SC後援会
FCブロケード後援会
さつきが丘スポーツ少年団サッカー部後援会
国本サッカークラブ後援会
鹿沼FC　ＯＢ会
埼玉FC後援会
今市第三カルナバル後援会
高根沢西FC保護者会
大金　弘
堀江寿一
中條　勉
烏山フットボールクラブウィングス11後援会
烏山フットボールクラブウィングス後援会
田野FC後援会
間々田FCがむしゃら後援会
FCグランディール宇都宮
ジェフユナイテッド市原・千葉・宇都宮スクール
小林敏明
平野　浩
FC西那須21アストロ槻沢後援会
間東FCミラクルズ後援会
山辺FC　親の会
真岡西サッカークラブ保護者会
西原FC
青木FC親の会
FC西那須21アストロ保護者会
佐藤　洋
添野一雄
FCブラジニア　サポーターズクラブ
GGP
河内サッカークラブ　ジュベニール後援会
NPO法人　栃木アミスタスポーツクラブ
NPO法人　AS栃木
君島建設有限会社
若林涼吏
岡本FC後援会
江川クラブ後援会
芳賀中学校保護者会
ヴェルディサッカースクール小山支部
矢口栄宏
FC佐野ジュニアユース後援会
滝の原サッカーOB会
東那須野サッカースポーツ少年団後援会
竹石秀夫
荒川FC
手塚健治
栃木SCジュニアユース後援会
FCスポルト宇都宮後援会
共栄FC保護者会
荒川隆志
円印刷(株)
宇都宮大学サッカー部OB会
大塚美佐子
佐野日大高校サッカー部保護者会
宇東高サッカー部親の会
宇都宮北高サッカー部OB会
KSC鹿沼父母会
鹿沼東光FC後援会
黒川秀樹
稲村FC後援会
SAKURA FOOTBALL CLUB Jr保護者会
SAKURA FOOTBALL CLUB JY保護者会
SAKURA FOOTBALL CLUB 後援会
田中俊一
益子高校サッカー部保護者会
株式会社ヌーベル
大橋政夫
真岡中学校サッカー部保護者協力会
安達賢二
佐田繁理
大沢JFC後援会
市貝FC後援会
真岡パープルレディース後援会
宇都宮サッカー協会
國井世津子
(有)スポーツショップ ヤマトヤ
(株)タカサゴ
(有)トータルヘルスクリエイト
矢板中学校サッカー部保護者会
市貝中学校サッカー部保護者会
真岡東中学校サッカー部協力会
宇都宮清陵高校サッカー部保護者会
大髙　和
金田北中学校サッカー部保護者会
FCクィーンズ後援会
FCガナドール 後援会
下山　浩
矢板中央高等学校サッカー部保護者会
阿久津好夫
手塚貴子

オフィシャルサプライヤー
ミズノ株式会社

＜編　集　後　記＞

第43号から皆様に「サッカー栃木」をお届けして来ましたが、今回をもちまして退く事になりました。今振り返ると、編集に携わった14年間は、短かったような気もしています。

毎回うまく編集出来なかった事は心残りですが、次の川端宏之・編集長に期待し、引き継ぎたいと思います。今まで「陰の編集長」としてサポートして下さった、協会事務局の谷田部さんにも感謝申し上げます。

その谷田部さんですが、この第71号には載せることが出来ませんでしたので、皆様に紹介しておきます。約８ヵ月の長期間に渡って開催された第１回の「ＪＦＡスポーツ・マネジャーズ・カレッジ2004」。全国から25名の猛者が受講しました。各都道府県協会の理事長や事務局長、日本協会の担当者であったりと多彩な顔ぶれでした。その中で紅一点、谷田部さんが見事第１位（優勝）で修了いたしました。（ＪＦＡニュース５月号、Ｐ20参照）

この場を借りて、お祝い申し上げます。この成果を是非とも、本県サッカー界に生かして欲しいものです。

そして、栃木のサッカーが「フェアプレー」でいつまでも発展する事を念じてペンを置きます。（奥澤）